三　次の文章を読んで、問いに答えよ。

（語り手が、聞き手に、醍醐天皇孫である博雅の三位の話をしている。）

「博雅の三位の逢坂の法師に琵琶を習へるは知らるるか、いかん」と。答へて言はく、「知らず」と。談りて言はく、「尤も興有ることなり。博雅は高名の管絃の人にて、(ア)いみじく道を重く求むるに、逢坂の法師は琵琶最上の由、世上に風聞す。人々請ひ習はしむといへども、さらにもつて得ず。また、住まふ所極めてもつてところせくて、行き向かふ人少々に、博雅まづ下人をもつて内々にいはする①やう、『などかくて思ひ懸けざる所には住まひするぞ。京都に居て過ぎよかし』とすかすに、法師歌を詠みて言はく、

世の中はとてもかくても過ぐしてむ宮も藁屋も果てしなければ

と詠みて答へず。使の者この由をもつて言ふ(ウ)に、博雅思ふやう、この法師の命は旦暮にあり。我も寿は知らね③ども、なほ流泉・啄木といふ曲は、この法師のみこそ伝ふ④なれ。相構へて弾くを聞きて伝へむと思ふところ、三ヶ年の間、夜々逢坂の法師の許に向かひ、窃かに宅の頭に立ち聞くに、さらにもつて弾かず。三年といふ八月十五夜、をろうはくもりたるに風少し吹くに、博雅思ふやう、あはれ今夜は興有る夜かな。逢坂の法師、流泉・啄木などは、今夜か弾くらむと思ひて、琵琶の譜を具して逢坂に向かふに、案のごとく琵琶を鳴らしむる程に盤渉調に鳴らす。博雅聞きて尤も興有り。啄木はこれ盤渉調なり。今夜この絃を鳴らす。定めて弾かむとするかと思ひて、うれしく思ふ間、法師独り心を遣りて、人もなきに歌を詠みて言はく、

逢坂の　A　の嵐のはげしきにしひてぞ居たるよを過ぐすとて

と詠みて絃を鳴らすに、博雅涙を流して啼泣す。道を好むことあはれなりと思ふに、法師独りまた言はく、『あはれ興有る夜かな。もし我ならぬ好者や今夜世間にあらむな。今夜心得たらむ人の来遊せよかし。物語せむ』と独り言ふを聞きて、博雅声を出だして言はく、『博雅こそ参りたれ』と言ひければ、法師言はく、『たれにかおはする』と問ふ(エ)に、『しかなり(オ)』と答ふ(カ)。法師お(キ)とに聞きければ、感じて物語りして心を遣りて、件の曲を伝へしむと云々。博雅身に琵琶を随へざるに依り、ただ譜をもつて伝へ請けて帰ると云々。

㋚諸道の好者はただかくのごとかるべきなり。近代の作法は誠にもつてあるべからず。さればこそ上手は、諸道にあれ、近代になき事なり。誠にもつてあはれなり」と談らるるに、また㋛問ひて言はく、「件の曲、近代ありや」と。㋜答へられて言はく、「しからず」と。また問ひて言はく、「件の法師の名はいかん」と。答へられて言はく、「慥かには覚えず。ただし千歳と言ふかや」と云々。また問ひて言はく、「横笛は博雅極めて候ふものか」と。答へられて言はく、「第一なり。競ふ者なし。皇帝・団乱旋を第一の曲に用ゐるなり。伝ふる者少なし。件の人の伝ふるところなり」と。

（『江談抄』による）

注　旦暮＝わずかな時間。　流泉・啄木＝琵琶の名曲。　をろうはくもりたるに＝月の表面が少し曇って。
盤渉調＝雅楽の曲調。　皇帝・団乱旋＝雅楽の曲名。

問1　傍線①の「るる」、②の「する」、③の「ね」、④の「なれ」の文法的意味として、最も適当なものを、それぞれ次のなかから選び、その番号をマークせよ。

1　断定　2　受身　3　打消　4　伝聞　5　使役　6　尊敬

問2　傍線㋐の「いみじく道を重く求むる」の意味として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

1　私財を全部注ぎ込んでも、優れた師匠の教えを乞う
2　詩文や和歌の道をしりぞけ、管絃の道のみを重んじる
3　往古の名人を手本に、自己の演奏技術の向上に努める
4　厳しい修行に耐え得るように、最高級の楽器を用いる
5　管絃の道を極めるためにはいかなる苦労もいとわない

問3　傍線㋑の「居て過ぎよかし」、㋖の「おとに聞きければ」を、それぞれ一〇字程度で現代語訳せよ。

問4 傍線㋒の「言ふ」、㋓の「問ふ」、㋕の「答ふ」、㋖の「問ひ」、㋗の「答へ」の主体として、最も適当なものを、それぞれ次のなかから選び、その番号をマークせよ。

1 語り手　2 聞き手　3 逢坂の法師　4 博雅の三位　5 使の者

問5 [A] に入れるのに、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

1 花　2 月　3 雪　4 関　5 峠

問6 傍線㋔の「しかなり」があらわす内容として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

1 逢坂の法師を招こうと、何度も使いを寄越した好者であること
2 秘曲を受けることを、天皇から認められている好者であること
3 琵琶に精通し、博雅の三位とも対等に語らえる好者であること
4 八月十五夜の雅びな遊びを、物語に著していた好者であること
5 逢坂の法師の独言に、応じるべくして来遊した好者であること

問7 傍線㋖の「諸道の好者はただかくのごとかるべきなり」の意味として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

1 いにしえの博雅の三位や逢坂の法師が、一途に修練する態度は、諸道の好者の理想とすべき姿である
2 諸道の好者とは、あらゆる芸能をたしなみ何事においても誰にも負けないよう鍛錬すべきものである
3 世間からの評価を得たいならば、逢坂の法師のように、京都を離れ、孤独に努力を続けるべきである
4 いつでも滞りなく芸の授受がなされるよう、相応の楽器を備えておくのが、諸道の好者の心得である
5 昔は一芸にこだわる上手が尊敬されたものだが、近代はなるべく多くの道に習熟することが好まれる

問8 本文の内容に合うものを、次のなかから二つ選び、その番号をマークせよ。

1 逢坂の法師は琵琶の曲を作ったとされているが、近代に譜面は残っておらず、千歳という曲名が記されるのみである。

2　管絃の名人と賞される博雅の三位は、琵琶だけでなく、横笛にも巧みであり、皇帝・団乱旋という曲を伝承していた。

3　博雅の三位は、粗末な住まいに甘んじる逢坂の法師の音楽の才能を惜しみ、ひそかに法師に和歌を送り、出京を促した。

4　近代は、求道的な人も少なくなってしまい、博雅の三位が逢坂の法師から苦労して引き継いだ秘曲も廃れてしまった。

5　逢坂の法師が所有する琵琶こそ最上の名器と聞いた博雅の三位は、なんとか譲り受けるよう、下人を通じて申し入れた。

6　八月十五夜の明月に独り盤渉調で啄木を演奏する逢坂の法師の姿を見た博雅の三位は、涙を流して出家遁世を決意した。